様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２００３２

研究課題名（和文）現代朝鮮語における＜ｎ挿入＞の総合的研究

研究課題名（英文）A Study of <n-insertion> in Modern Korean

研究代表者
辻野　裕紀（TSUJINO, Yuki）

九州大学・言語文化研究科（研究院）・講師

研究者番号：７０６３６７６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,200,000円、（間接経費）　360,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主たる目的は若年層（20代）ソウル方言話者の〈n挿入〉実現実態を闡明するところにある．そのために，本研究では，若年層ソウル方言話者を対象にインフォーマント調査とその分析を行なった．
その結果，若年層ソウル方言話者の〈n挿入〉実現如何には，総じて後行要素の頭音が最も大きく関わっていること，また，後行要素の長さ，先行要素の末音，なじみ度，語構造，後行要素の第1音節の音節構造，語句の長さなど，多種多様な要因が抗衡しつつ，重層的に関与していることを明らかにした．こうした様相はいわゆる規範と懸隔しており，社会言語学的にも興味深いものである．

研究成果の概要（英文）：The main aim of this study is to clarify the conditions of <n-insertion> by young Seoul dialect speakers (in their 20s) in Modern Korean. This study, focusing on young Seoul dialect speakers as the research targets, conducted an informant research analyzing <n-insertion>.
The results showed the following facts: The instances of <n-insertion> by young Seoul dialect speakers are most strongly related to the initial sound of the following element. In addition, other various factors such as the length of the following element, the final sound of the preceding element, the level of familiarity with the word, the structure of the word, the syllable structure of the first syllable of the following element, and the length of the word or phrase, affect the occurrence of <n-insertion> in a multi-layered way. Further, it is interesting, from the view of sociolinguistics, to note that <n-insertion> by young Seoul dialect speakers occurs apart from the norm.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：朝鮮語　n挿入　音節接合論　形態音韻論　社会言語学

１．研究開始当初の背景

本研究は，現代朝鮮語の〈n 挿入〉について論ずるものである．現代朝鮮語の〈n 挿入〉の実現様相を調査し，〈n 挿入〉がいかなる環境で生じるかについて，多角的な視座から，闡明するところに本研究の目的がある．

〈n 挿入〉に関する研究はこれまでもなされてきたが，いかなる環境において生じるのかという〈音韻現象〉としての核心的な問題については全き解決を見ていない．さらに，個人差，世代差，方言差などといった，社会言語学的な差異が明らかに存在するにもかかわらず，そうした点についての考察はいよいよ行われていなかったと言ってよい．

そうした研究の状況を背景として，本研究ではソウル方言と慶尚道方言における〈n 挿入〉の実現実態について調査，分析を行なうこととした．

２．研究の目的

上でも述べた通り，本研究の目的は，現代朝鮮語の〈n 挿入〉の実現様相を調査し，〈n 挿入〉がいかなる環境で生じるかについて，多角的な視座から，闡明するところにある．インフォーマント調査とそのデータ分析を緻密に行なうことで，先行研究を凌駕する成果が得られることが期待できる．また，その成果は，近年需要が急速に高まっている朝鮮語教育へ直接的に還元しうるものである．

３．研究の方法

韓国・ソウルにおいて 3 度（予備調査：2012 年 9 月，本調査：2013 年 3 月，2013 年 9 月）に亘る調査を実施した．事前に準備した調査票の語句をインフォーマントに読み上げてもらう，いわゆる〈読み上げ式〉によって調査を行なった．

本調査においては，全 33 名の若年層ソウル方言話者をインフォーマントとし，全 1025 個の語句の発音について調べた．この調査語彙数は既存の諸研究を遥かに凌ぐ量である．

４．研究成果

（１）若年層ソウル方言話者における〈n 挿入〉の実現実態について：

全 33 名の若年層ソウル方言話者をインフォーマントとし，全 1025 個の語句の発音を調べた．調査語句は，「固有語」，「漢字語」，「外来語」，「混種語」，「句」の 5 種に分けうる．以下，各々についての分析結果を述べる．

まず，固有語については，さらに〈固有語合成語〉，〈固有語畳語〉，〈固有語単語＋(i)yo〉の 3 種に分けた．

固有語合成語において〈n 挿入〉実現如何に最も大きく関わっているのは，「後行要素の頭音」と「後行要素の長さ」（後行要素の頭音が/i/の場合）である．後行要素の頭音が/y/の場合は総じて〈n 挿入〉が起きやすい．後行要素の頭音が/i/の場合は，後行要素の長さが 1 音節のものは〈n 挿入〉が起きやすく，2 音節以上のものは〈n 挿入〉が起きにくい．また，他に「先行要素の末音（共鳴音か閉鎖音か）」，「なじみ度」，「語構造（複合語か派生語か）」も〈n 挿入〉実現如何に関与する．

固有語畳語においても，後行要素の頭音が/y/の場合は〈n 挿入〉が起きやすく，/i/の場合は起きにくい．他に「先行要素の末音」や「語の長さ」も〈n 挿入〉実現如何に関わっている．語が長い場合には，休止を志向する傾向がある．

〈固有語単語＋(i)yo〉については，「丁寧さ」を表す補助詞{yo}の 2 つの異形態/yo/，/iyo/のうち，どちらがより現れやすいか，またその際〈n 挿入〉が生じるか否かについて調べた．その結果，子音で終わる固有語単語には専ら/iyo/が付き，その際〈n 挿入〉は生じないことが明らかになった．ほぼ唯一の例外は cengmalyo[tʃɔŋmalljo]《本当ですか？》だが，これは意味的・機能的に考えて間投詞的であり，語彙化した発音だと考えられる．

漢字語については，さらに〈漢字語合成語〉，〈漢字語人名〉，〈姓＋肩書等〉，〈姓名＋肩書等〉，〈姓名＋yek（訳）〉，〈本貫＋姓〉，〈漢数詞〉，〈いわゆる語$^{+}$レベルの複合語〉の 8 種に分けた．

漢字語合成語において〈n 挿入〉実現如何に最も大きく関わっているのは，「後行要素の頭音」である．後行要素の頭音が/y/の場合は一体に〈n 挿入〉が起きやすく，後行要素の頭音が/i/の場合は〈n 挿入〉が基本的に起きない．固有語合成語と異なり，後行要素の長さは問わない．また，固有語と同じく「先行要素の末音」も関与する．さらに，後行要素の頭音が/y/であっても，〈1 音節漢字語形態素＋1 音節漢字語形態素〉，〈1 音節漢字語形態素＋重音節で始まる 2 音節漢字語〉といった構造のものは概して〈n 挿入〉が起きにくい．3 つ以上の自立語からなる漢字語合成語は「語構造（枝分かれ構造）」も関わる．

漢字語人名では，「後行要素の頭音」と「後行要素の第 1 音節の音節構造」（後行要素の頭音が/y/の場合）が〈n 挿入〉実現如何に大きく関わっている．漢字語合成語と同じく，後行要素の頭音が/i/の場合には〈n 挿入〉が基本的に起きない．後行要素の頭音が/y/の場合には，後行要素の第 1 音節が軽音節のものは〈n 挿入〉が起きやすく，重音節のものは起きにくい．また，他に「先行要素の末音」や「なじみ度」なども関わっている．

〈姓＋肩書等〉でも，〈漢字語人名〉と概ね同じ傾向が観察された．

〈姓名＋肩書等〉でも，漢字語合成語と同じく，「後行要素の頭音」がよく効いている．後行要素が yesa《女史》や yengsa《領事》の場合，休止実現率が高く，その分〈n 挿入〉実現率が低くなっているが，これは「語の長さ」が原因であろう．固有語畳語でも観察されたように，語が長い場合には休止を志向す

るようである．

〈姓名＋yek（訳）〉でも，後行要素の頭音が/y/であることが作用し，概して〈n 挿入〉が起きやすい．先行要素の末音も〈n 挿入〉実現如何に聊か関与し，姓名の末音が閉鎖音の場合の〈n 挿入〉実現率はやや下がる．

〈本貫＋姓〉の〈n 挿入〉実現如何も他の漢字語合成語のそれと軌を一にする．

漢数詞では，後行要素の頭音が完全に〈n 挿入〉実現如何を統べている．後行要素の頭音が/y/の場合は〈n 挿入〉が起き，後行要素の頭音が/i/の場合は〈n 挿入〉が起きない．インフォーマントによる揺れもほとんど見られない．例外は，il-il[illil]《一一》とil-i[illi]《一二》だが，これらは頻度が圧倒的に高い組合せであり，語彙化した発音だと思われる．

いわゆる語$^{+}$レベルの複合語でも，「後行要素の頭音」が〈n 挿入〉実現如何に最も大きく関わっている．語を問わず休止を志向するインフォーマントが少なからずいた点が他の漢字語合成語との違いだが，必ず休止を伴わなければならない日本語の語$^{+}$レベルの複合語とは性質が大きく異なると言える．

外来語においても，「後行要素の頭音」が〈n 挿入〉実現如何に最も大きく関わっている．後行要素の頭音が/y/の場合は〈n 挿入〉が起きやすく，/i/の場合は〈n 挿入〉がほとんど起きない．また，固有語や漢字語と同様，「先行要素の末音」や「語構造（枝分かれ構造）」，「語の長さ」も〈n 挿入〉実現如何に関与している．

混種語については，後行要素の語種が〈n 挿入〉実現如何を統べる．つまり，後行要素が固有語であれば固有語合成語と，漢字語であれば漢字語合成語と，外来語であれば外来語合成語と類似した振る舞いをする．

句については，統辞論的観点から，〈冠形語＋体言〉，〈体言＋体言〉，〈副詞語＋用言〉，〈絶対格主語＋用言〉，〈絶対格目的語＋用言〉，〈対格目的語＋用言〉，〈主題目的語＋用言〉の 7 種に分け，各々の分析を行なった．その結果，語の場合と異なり，発話速度や句の長さ，助詞の介在などの影響で休止実現率が高い句が散見されるものの，全体的な傾向としては，「後行要素の頭音」が〈n 挿入〉の実現如何に最も大きく関与するなど，語の場合とよく似た傾向が観察された．

そして，以上のような結果は，いわゆる規範と懸隔している．辞書の記述では〈n 挿入〉が起きることになっていても，実際には起きない，あるいは起きにくいものが数多存在し，〈n 挿入〉の実現如何には，後行要素の頭音をはじめ，様々な要因が複合的に鬩ぎ合い，絡み合っていることが明らかになったのである．この事実は極めて重要である．一部の先行研究によって，規範と言語事実が一致しないことが指摘されてはきたものの，調査語彙数や調査人数の貧弱さ，調査方法の欠陥などによって必ずしも信頼に値するものとは言い得なかった．しかし，本調査で，分節音や語構造，語種，なじみ度などが異なる，全 1025 個という広範な語句を緻密に調査，分析したことで，若年層ソウル方言話者における〈n 挿入〉の実現実態がより鮮明に浮かび上がってきたと言えよう．そして，この調査資料と分析結果は，「前の要素が子音で終わり，後ろの要素が/i/か/y/で始まるとき，/n/が挿入されることがある」などといった曖昧な筆致で〈n 挿入〉の説明を糊塗してきた朝鮮語教材の記述の改善にも直接的に裨益しうるものである．

以上の内容については，その一部を「東アジア日本語・日本文化フォーラム」にて発表したが，近々その全体を学術誌に投稿する予定である．

なお，時間の都合上，当初予定していた慶尚道方言における〈n 挿入〉の実態調査は行なえなかった．今後の課題としたい．

（２）〈n 挿入〉の形態論的条件：

〈n 挿入〉が生じるための形態論的条件として，多くの先行研究では「後行要素が自立形態素であること」を挙げている．しかしながら，一部の先行研究が指摘するように，その「反例」として，①後行要素が補助詞 yo の場合；②後行要素が漢字語接尾辞の場合などがあり，これらをどのように説明すべきかが従前の研究の懸案事項であった．そこで以下のように論を展開し，〈n 挿入〉の形態論的条件を明らかにし得た．（辻野裕紀「言語形式の自立性と音韻現象 ―現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として―」，『朝鮮学報』229，朝鮮学会）

まず，言語形式を「自由形式」か「拘束形式」のいずれかに二者択一的にカテゴライズしてきた従前の研究の問題点を剔抉し，言語形式の自立度の階層性，連続性を指摘した．その上で，服部四郎が謂う「附属語」「附属形式」などといった概念を援用しつつ，形態論的条件の反例となる①と②を検討した結果，①補助詞 yo，②漢字語接尾辞はともに，拘束形式の中では，相対的に自立性が高いことが明らかになった．このことは，とりもなおさず，〈n 挿入〉の形態論的条件として，後行要素の自立性に対する着目が正しいことを意味している．つまり，「後行要素が自立形態素であること」という形態論的条件に対して，一部の先行研究で出された反論は穏当ではなく，〈n 挿入〉が生じるためには，後行要素は，狭義の完き自立形態素ではなくとも，自立的な要素であることが必要だと結論づけうる．

（３）〈n 挿入〉の〈発生論〉と〈機能論〉：

「〈n 挿入〉という形態音韻論的現象がなぜ生じるか」という問題についても従前の研究は十分に得心のいく答えを出していない．そこで，この問いを 2 つに立て直し，考察を行なった．（辻野裕紀「現代朝鮮語の〈n 挿入〉

に関する一考察 ―発生論と機能論―」,『韓国朝鮮文化研究』13, 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室）

1 つは「なぜ〈n 挿入〉が起きるようになったのか」という〈通時的側面〉である．これは，過去のある時点においてなぜ〈n 挿入〉という現象が生起することとなったかを摸る〈発生論〉と言い換えてもよい．

そして，もう 1 つは「なぜ今も〈n 挿入〉が起き続けているのか」という〈共時的側面〉である．〈n 挿入〉の〈機能論〉と呼ぶべき問題である．

まず，〈n 挿入〉の〈発生論〉については，Ko Kwang-Mo の説に基づき，〈n 挿入〉の起源を 18 世紀後半の，語頭における/i/,/y/の直前の/n/の脱落に求めた．そして爾来,〈類推〉（analogy）によって，合成語における子音の後という環境で，元来/n/がなかった語にまで/n/が挿入されるようになり，それに伴って,〈再語彙化〉(relexicalization) が進行した．この再語彙化によって，基底形から/n/がなくなり，/n/を含む形は「挿入規則」によって派生されることとなる．これが音韻規則としての〈n 挿入〉の成立である．

そして，この成立過程は，音声学的蓋然性に支えられている．後行要素が自立形態素の場合のみに〈n 挿入〉が起きうること，漢字語において後行要素の頭音が/i/で始まる場合には〈n 挿入〉がほとんど起きないことも，この発生論的視座から説明可能である．

〈n 挿入〉の〈機能論〉については，〈n 挿入〉を〈終声の初声化〉と対峙させて考えることで，その機能が〈形態素境界の表示〉にあることを明らかにした．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①辻野裕紀,「現代朝鮮語の〈n 挿入〉に関する一考察 ―発生論と機能論―」,『韓国朝鮮文化研究』13, 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室，査読無，2014, pp.79-96.

②辻野裕紀,「言語形式の自立性と音韻現象 ―現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として―」,『朝鮮学報』229, 朝鮮学会，査読有，2013, pp.1-32.

〔学会発表〕（計３件）

①辻野裕紀,「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について ―若年層ソウル方言話者を対象に―」，第 15 回東アジア日本語・日本文化フォーラム，於九州大学伊都キャンパス，2014 年 2 月 7 日.

②辻野裕紀,「現代朝鮮語における言語形式の自立性と音韻現象 ―〈n 挿入〉を対象として―」，麗澤大学言語研究センター主催研究会（招待），於麗澤大学，2014 年 1 月 12 日.

③辻野裕紀,「言語形式の自立性と音韻現象 ―現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として―」，九州大学言語研究会第 162 回例会，於九州大学伊都キャンパス，2013 年 1 月 31 日.

６．研究組織

(1)研究代表者

辻野 裕紀（TSUJINO, Yuki）
九州大学・大学院言語文化研究院・講師
研究者番号：70636761